

# 会 報

No.38 (1991年2月)

## 目 次

- ◆1990年度日本分子生物学会評議員会議事録要旨…………… 1
- ◆第13回日本分子生物学会総会議事録要旨…………… 3
- ◆日本分子生物学会第7回評議員選挙について…………… 5
- ◆第14回(1991年)日本分子生物学会年会のお知らせ(その1) …… 7
- ◆各種シンポジウムのお知らせ…………… 8
  - 第42回タンパク質構造討論会…………… 8
  - 第18回核酸化学シンポジウム…………… 9
  - 第2回日本微量元素学会…………… 11
  - 第5回ヤクルト国際シンポジウム…………… 12
  - 千里ライフサイエンスセミナー…………… 13
  - 国際シンポジウム「化学療法におけるDNAトポイソメラーゼ」… 14
- ◆日本学術会議より…………… 15

日 本 分 子 生 物 学 会  
(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

## ◆1990年度評議員会議事録要旨

日 時 1990年11月25日 午後4時～8時

場 所 京都 新都ホテル 八坂の間

出席者 関口睦夫(会長)、饗場弘二、池田日出男、今本文男、大石道夫、岡崎恒子、小川英行、小関治男、上代淑人、志村令郎、杉浦昌弘、鈴木義昭、中西重忠、堀内忠郎、本庶佑、三浦謹一郎、水野重樹、村松正実、吉川寛、清水憲二(庶務幹事)、西郷薫(会計)、高浪満(編集)、大島靖美(集会)

### 報告事項

- (1) 関口会長より、11月1日現在の個人会員数は4076名(このうち正会員2952名、学生会員1053名、外国在住会員71名)、賛助会員は29社(36口)であることが報告された。前年同期の約500名増である。
- (2) 遺伝子操作協議会の委員として本学会より榊佳之、山本正幸両氏を推薦した。
- (3) 小川第13回年会会長より、この年会においては1149題のポスター示説と246題のシンポジウム口演が予定されているとの報告があった。

### 協議事項

- (1) 西郷会計幹事より前年度会計収支決算報告、本年度会計中間報告、および来年度事業計画ならびに予算案が提示され、了承されたので総会にはかることにした。
- (2) 1991年度第14回年会について  
1991年度第14回日本分子生物学会年会(九州地区)について、堀内忠郎年会会長より、会期は12月17日(火)～12月20日(金)、会場は福岡国際センターおよび福岡サンパレス、発表形式は13回年会の終了を待って検討するとの報告があり、了承された。
- (3) 1992年度第15回年会について  
1992年度第15回年会担当を京都地区とし、年会会長を今本文男京都薬科大学教授に委嘱することを決定した。今本評議員より、会期は1992年12月7日(月)～12月10日(木)、場所は国立京都国際会館を予定している旨、説明があった。
- (4) 評議員改選の件  
現評議員の任期は1991年3月31日をもって終了し、改選される。選挙に必要な会員名簿を1990年12月15日付けで作成すること、選挙管理委員を本庶佑京都大学教授他2名の会員に委嘱することが承認された。  
なお、この件に関連して鈴木義昭評議員より、本学会の規模の拡大に応じ、また若手の参画を期待するためにも、評議員の定数是正を検討してはどうかという意見が出された。この件については将来検討委員会が検討することになった。

(5) 学術会議会員推薦人選定について

1990年9月21日付けで、本学会が構成員数3614名で学術会議登録団体として認められたのに伴い、第15期学術会議会員推薦人として本学会に4名の枠が内示された。推薦人の選定法について検討した結果、これまでの前例にそって総会においてこれを評議員会に委嘱することの承認を得たうえで、評議員会としては会長に一任することが了承された。

(6) 科学研究費について

A. 「分子生物学」分科の新設要求

平成3年度より一般研究(C)のみの3年間時限という形で「分子細胞生物学」細目が新設された。しかしこれとは独立に、「分子生物学」分科を新設するように引き続き働きかけることが確認された。

B. 「分子生物学」関連細目の科学研究費審査委員

従来の「生物物理学」分科中の「分子遺伝学・分子生理学」細目に1名、新設の「分子細胞生物学」細目に4名の審査委員候補を本学会から推薦できることになり、今回は時間的制約から評議員による投票で選定した。結果の公表について検討したが、種々の問題もあるのでとりあえず学術会議の方針にしたがって非公開とすることにした。

(7) 欧文誌について

高浪編集幹事から欧文誌に関するワーキンググループの検討結果が中間報告され、それに基づいて意見を交換した。原則的にはコミュニケーター方式とする案を中心に、発刊の是非や欧文誌に対する学会の関与の方式、財政的基盤、高水準の維持方法などが話し合われたが、編集長の人選が最重要であることが指摘され、今後更に具体的に検討を続けることとなった。

(8) その他

- ・高浪編集幹事より、B.B.A.誌から Gene structure and expression 部門の常任レフェリー2名を本学会から推薦して欲しいという要請があり、会長と相談して岩淵雅樹(京大理)、饗場弘二(筑波大)両氏を推薦した旨、報告があった。
- ・三浦評議員より(庶務)幹事の労力が增大しているので謝金を出したらどうかという意見が出された。この件については次期会長への申し送り事項とする。
- ・関口会長より日本のR I管理に関する会員からの質問状が紹介され、意見を交換した。

◆第13回日本分子生物学会総会議事録要旨

日 時 1990年11月28日 午後14:00—15:00

場 所 国立京都国際会館本館メインホール

- (1) 関口会長挨拶の後、議長として磯野克巳（神戸大）、小川智子（阪大）両氏が会長より推薦され、承認された。議長は委任状223通を含め、総会の成立を確認した。
- (2) 経過報告
  - a) 庶務報告：清水庶務幹事より、前回総会以降の本学会事業の経過、次年度年会の日程、次期評議員選挙の日程などについて報告があった。
  - b) 会長報告：関口会長より、次々年度年会（第15回）の場所と日程が決まったこと、文部省科学研究費に「分子生物学」の分科を設置する運動の経過、分子生物学関係の欧文誌発行についての検討など、11月25日の評議員会における論議を基にした報告があった。
- (3) 議事
  - a) 西郷会計幹事より前年度（1989）会計収支決算報告があり、これを承認した。
  - b) 同じく本年度（1990）会計収支中間報告があり、承認された。
  - c) 同じく来年度（1991）事業計画および予算案について説明があり、承認された。承認された1991年度予算案は下記のとおりである。

1991年度日本分子生物学会収支予算案（1991年4月1日～1992年3月31日）

収入の部

科 目	前年度予算額	予 算 案	摘 要
学 会 費	7,990,000	8,750,000	入会金 200,000 正会員 6,750,000 学生会員 1,800,000
賛 助 会 費	1,050,000	1,080,000	36口
広 告 収 入	1,800,000	0	名簿製作なし
預 金 利 子	200,000	400,000	
雑 収 入	300,000	300,000	印税他
小 計	11,340,000	10,530,000	
前 年 度 繰 越 金	9,000,000	10,000,000	(見込概算)
総 計	20,340,000	20,530,000	

## 支出の部

科 目	前年度予算額	予 算 案	摘 要
事 業 費	2,600,000	2,700,000	
〔 会 報 発 行 〕	〔 850,000 〕	〔 900,000 〕	第14回年会
〔 プ ロ グ ラ ム 〕	〔 550,000 〕	〔 600,000 〕	
〔 特 別 講 演 謝 金 〕	〔 200,000 〕	〔 200,000 〕	〃
〔 第 15 回 年 会 補 助 〕	〔 1,000,000 〕	〔 1,000,000 〕	
評 議 委 員 会 費	2,200,000	800,000	
〔 委 員 会 費 〕	〔 600,000 〕	〔 800,000 〕	
〔 役 員 選 挙 名 簿 作 製 費 〕	〔 1,600,000 〕	〔 0 〕	
業 務 委 託 費	3,700,000	4,000,000	〔 助 〕 日本学会事務センター
一 般 事 務 費	3,155,000	2,985,000	
〔 用 品 費 〕	〔 5,000 〕	〔 5,000 〕	
〔 印 刷 費 〕	〔 50,000 〕	〔 80,000 〕	会報に名簿同封なし
〔 通 信 費 〕	〔 3,000,000 〕	〔 2,800,000 〕	
〔 事 務 謝 金 〕	〔 50,000 〕	〔 50,000 〕	
〔 雑 費 〕	〔 50,000 〕	〔 50,000 〕	
準 備 金 費	0	8,000,000	将来事業のための準備金
予 備 費	500,000	500,000	
小 計	12,155,000	18,985,000	
次 年 度 繰 越 金	8,185,000	1,545,000	
総 計	20,340,000	20,530,000	

d) 清水庶務幹事より、第15期日本学術会議会員選任のために本学会に内示された4名の推薦人の人選を、前例にしたがって評議員会に一任するとの提案理由説明があり、承認された。

e) その他

○石浜明氏（遺伝研）より、科学研究費の問題については、会長・評議員会に任せるのではなく、学会として組織的な努力をすべきこと、審査委員の選出方法を明確にすべきであること、AMBOなどの国際的協力を学会としてもっと努力してしかるべきであることなどの意見が表明された。これらについて会長より指摘のうちの幾つかは現在評議員会の将来検討委員会で論議中であるとの答弁があった。

○富沢純一氏（遺伝研）より、R Iの管理と研究効率についての問題提起がなされた。これらについて会長より、重要な問題であり、将来にわたって考えてゆく必要があるとの答弁があった。

(4) その他

総会終了後、小川英行第13回年会会長の挨拶があり、続いて堀内忠郎次回年会会長より第14回年会の日程や準備状況について説明があった。

## ◆日本分子生物学会第7回評議員選挙について

日本分子生物学会会則第11条と同細則第7条(次頁)によって、第7回評議員選挙を行います。去る1990年11月25日の評議員会において第7回評議員選挙の管理委員として、本庶佑(京大・医)、清水章(京大・遺伝子)、山岸秀夫(京大・理)の3氏が委嘱されました。

次いで選挙管理委員3名の打合せを経て、具体的には次のように選挙を行うことになりましたので、会員各位のご協力をお願いいたします。

### 記

今回の選挙における選挙権者、被選挙権者は、1990年12月15日までに入会手続を行った正会員とします。同封の「会員名簿」より10名を選んで、その氏名を投票用紙にご記入ください。投票用紙を同封の小封筒(投票用紙在中と印刷)に入れ封をした後、同封の送付用封筒(選挙管理委員会御中と印刷)に入れて、ご自分の住所、所属および氏名を記入の上ご送付下さい。

投票締切日 1991年3月22日(金)(必着)

開票予定日 1991年3月27日(水)

当選者の決定 得票数の多い順に20名を当選者とします。同数得票の場合は年長順とします。

なお、次の場合には投票または被記名者が無効となりますので、ご注意ください。

- 1) 投票用紙に10名以上連記した場合。但し10名以下の場合には有効です。
- 2) 投票者の氏名が送付用封筒に記入されていないとき。
- 3) 日本分子生物学会細則第7条3項により、以下の方は連続して評議員になることができませんので、今回は記名しないで下さい。なお、この方々に投票のあった場合には、その方に関してのみ、無効と致します。

池田日出男、 今本文男、 岡崎恒子、 上代淑人、 志村令郎、 杉浦昌弘、  
鈴木義昭、 関口睦夫、 堀内忠郎、 本庶 佑

1991年1月18日

日本分子生物学会選挙管理委員会

本庶 佑

清水 章

山岸 秀夫

## 会 則 (抜すい)

第10条 本会には、会長1名、評議員若干名、会計監査2名の役員をおく。

1. 会長は本会を代表し、会務を統括する。
2. 評議員は評議員会を構成し、本会に関する事項を審議する。
3. 会計監査は本会の会計を監査する。

第11条 評議員は正会員の中から投票により選出される。会長は評議員の互選により定める。会計監査は評議員、幹事以外の正会員の中から評議員の投票により選出される。役員任期は2年とする。

## 細 則 (抜すい)

第7条 評議員の選出は次のように行う。

1. 会長は正会員の中から3名を選んで選挙管理委員会を委嘱する。  
選挙管理委員会は選挙事務を行う。
2. 投票は1人1票、無記名10名連記とし、郵送によるものとする。
3. 評議員は連続して3回選出されることはない。この制限に抵触する者の氏名は選挙要項に公告される。
4. 得票者中の上位の者より順に20名を選出する。同数得票者については選挙要項に従って順位を定める。

第8条 新会長の選任は次のとおり行う。

1. 会長は新評議員を招集する。新評議員の互選により新会長を選ぶ。
2. 投票は無記名单記とする。投票総数の過半数を得た者を新会長とする。
3. 投票総数の過半数を得た者がいないときは、高点順に2名をとり改めて投票を行い、最高点者を新会長とする。このとき同点の場合には抽選により決定する。
4. 会長は連続して3回選出されることはできない。
5. 会長は評議員を兼ねるものとする。

## ◆第14回（1991年）日本分子生物学会年会のお知らせ

第14回分子生物学会年会は下記の要領で開催されます。

1. 会期：1991年12月17日（火）～20日（金）

総会および懇親会 12月18日あるいは19日の予定

2. 会場：福岡サンパレスおよび福岡国際センター

（福岡市博多区築港本町2-1）

3. 形式：

現在検討を重ねておりますが、一般講演を口頭で行うのに十分な広さの会場を必要数確保できないこと、第13回年会（1990年）のポスター発表の評価が高かったことを考え合わせ、一般演題はポスターとし、同時に幾つかのシンポジウムを行うことを考えております。詳細については次の会報でお知らせしますが、およそ次のような計画を立てています。

(a) ポスター発表

会場：福岡国際センター（国立京都国際会館イベントホールよりやや広い）。

毎日300～400題ずつを、ほぼ一日展示する。

申込：一般演題申込はすべてポスターセッションとして受け付ける。

申込締切：未定。一応、一般演題の締切は8月末頃を予定しています。

(b) シンポジウム

内容および形式：現在検討中。

会場：大小の部屋を含めて、3～6会場しか使用出来ません。

発表形式、実際の運営等についていろいろ御意見がおりかと思えます。準備委員会としては、よりよい年会を持ちたいと考えておりますので、ご意見、あるいはご希望のございます方は、なるべく早い時期に準備委員会までお知らせ下さい。

第14回分子生物学会年会

準備委員会委員長

堀内 忠郎

（九州大学薬学部）

（Fax:092-632-6648）

## ◆各種シンポジウムのお知らせ

### ○第42回タンパク質構造討論会

共 催 日本化学会、日本生化学会、日本生物物理学会、日本薬学会、  
日本農芸化学会、日本分子生物学会、日本蛋白工学会  
日 時 平成3年10月6日(日)、7日(月)  
会 場 港区芝公園1-5-30  
共立薬科大学講堂

講演申し込み締切 5月31日(金)必着

1. 講演は断片的な研究発表ではなく、データがよく吟味されていて活発な討論の対象になり得るものに限ります。第64回日本生化学会大会(東京)の直後ですので、同大会へ発表するものと同様の講演の申し込みは御遠慮願います。
2. 講演総数は約25件に限って、討論を十分にしたいと考えております。申し込み多数の場合、採否は世話人にお任せ願います。
3. 採否につきましては、6月中旬頃までに世話人より講演申し込み人に直接御連絡致します。
4. 講演時間は、討論を含めて30分の予定です。
5. 講演申し込みは、発表者、所属、連絡先(Faxおよび電話番号も併せ記入して下さい)、題目、及び要旨(特に討論の対象となる個所については具体的に記述して下さい。1,200字)を、すべてB5判、400字詰め横書き原稿用紙に記入して、世話人宛にお送り下さい。

講演要旨原稿締切 8月10日(土)

詳細は採択講演の申し込み者に直接連絡致します。

参加費 3,000円(学生1,500円)

要旨集代 2,000円(送料込)

懇親会費 4,000円(学生2,000円)

(いずれも予定)

申し込み及び連絡先 〒113 文京区本郷7-3-1

東京大学薬学部薬品物理化学教室

荒田 洋治

TEL 03-3812-2111 内線4810

## ○第18回核酸化学シンポジウム予告

と き 平成3年10月29日(火)～31日(木)

と ころ 仙台市民会館(小ホール)

(〒980 仙台市青葉区桜ヶ岡公園4-1(西公園))

TEL 022-262-4721)

共 催 高分子学会・日本化学会・日本生化学会・日本生物物理学会・  
日本農芸化学会・日本分子生物学会・日本薬学会・  
有機合成化学協会

討論主題 核酸および関連化合物の有機化学、物理化学、分析化学、  
生化学および分子生物学

発表時間 1演題15分、なお演題数が多く、3日間で消化出来ない場合には、研究  
概要口頭説明4～5分を含むポスターセッションを設けます。口頭また  
はポスター発表の決定は組織委員会に一任願います。

講演申込締切 4月20日(土)

B5判大の用紙に、1)演題、2)発表者の所属・氏名(講演者に○)、3)連絡  
先(〒、TELも)、4)和文要旨(約200字)、を記載し、申し込み受領通知の葉書  
(返信宛先および演題名を記入のこと)を添えて下記あてお申し込み下さい。

講演要旨英文原稿締切 6月22日(土)

申込者には、後日、講演要旨作成要項、原稿用紙を送付いたしますので、同要項  
に従って英文要旨を作成の上、期日までにご返送下さい。要旨は Nucleic Acids  
Symposium Series (1991) として IRL Press 社より発行されます。

参加予約申込締切 8月24日(土)

1)氏名、2)所属、3)連絡先、を明記の上、銀行振込(富士銀行仙台支店普  
通預金1920188第18回核酸化学シンポジウム)にて下記参加登録費を送金下さい。な  
お、参加登録証は当日会場にてお渡し致します。

参加登録費 予約：一般(共催学会会員)3,000円、学生5,000円

当日：各1,000円増し

懇親会 10月30日(水) 18:00～

仙台東急ホテル(仙台市青葉区一番町2-9-25 TEL022-262-2411)

参加費：一般10,000円、学生8,000円原則として予約制とします。参加費を添え、参  
加登録予約時にお申し込み下さい。なお余裕がある場合には前日、申込受付を行う  
こともあります。

## 宿泊案内

いくつかのホテルを割引料金で用意しております。希望者は東急観光仙台支店核  
酸化学シンポジウム係（TEL022-263-3232 FAX022-265-5765 担当 女池信行、  
太細正志）あて、お申し込み下さい。

申込連絡先：〒980 仙台市青葉区荒巻字青葉

東北大学薬学部薬化学教室

金子主税または片桐信弥

TEL (022) 222-1800 ex.3713or3715

FAX (022) 263-9205

○第2回日本微量元素学会会告

会期：平成3年7月4日(木)、7月5日(金)

会場：オオサカサンパレス

〒565 大阪府吹田市千里万博公園 1-5 ☎06-878-3804

講演

1. 招待講演：交渉中
2. 一般演題：微量元素に関する演題を幅広く募集します。発表部門：(G)
3. シンポジウム(公募、一部指定)：  
テーマ：I) 酸化的障害と微量元素 (S-I)  
II) 微量元素と治療をめぐる諸問題 (S-II)
4. ワークショップ(公募、一部指定)：  
テーマ：微量元素の測定法並びに基準値に関する問題点 (W)

募集・応募要項

1. 所定の抄録用紙に書式に従ってタイプ印刷またはワープロ印字し、コピー3部を含め計4部をお送り下さい。  
(抄録の記入に当たっては見本とその注意事項をよく参照して下さい。)
2. 通知用葉書に所要事項と宛名を記入し、41円切手2枚を貼って下さい。
3. 封筒に「微量元素演題申込み」と朱記し、簡易書留で郵送して下さい。
4. 演題の採否ならびに発表部門は会長に一任願います。
5. 演題締切り：平成3年4月20日(土)必着
6. 演題申込先：〒553 大阪市福島区福島1-1-50  
大阪大学 小児外科  
第2回日本微量元素学会  
会長 岡田 正
7. 問合わせ先：大阪大学 小児外科 第2回日本微量元素学会事務局(高木洋治)  
(抄録用紙請求) ☎06-451-0051 (内線2655) FAX 06-454-1657  
06-451-4817 (直通)

・本学会は個人会員制です。演者(共同演者を含む)は会員に限ります。

・入会問合わせ先および入会申込先：日本微量元素学会事務局  
日本大学医学部化学教室内  
〒173 東京都板橋区大谷口上町30-1  
☎03-3972-8111 (内線2296)  
FAX 03-5995-6956

注：宿泊に関しては後日、旅行会社から案内を差し上げる予定です。

○1991ヤクルト国際シンポジウム（第5回）の開催について

1. 開催日時 1991年5月24日(金)PM 1:00~5:40
2. 場 所 ヤクルトホール  
東京都港区東新橋1丁目1番19号  
TEL03(3574)8920
3. 開催形態 主催 株式会社ヤクルト本社  
一般公開（入場無料：同時通訳付）
4. 申し込み方法 官製葉書に住所・氏名・勤務先・TEL・年齢を記入の上5月10日(金)までにお申し込み下さい。先着順に入場券をお送りします。(定員574名)  
なお、定員になり次第締切らせていただきます。
5. 申し込み先 株式会社ヤクルト本社 広報室「国際シンポジウム」係  
〒105 港区東新橋1丁目1番19号
6. メインテーマ “Molecular Basis of Carcinogenesis”
7. オーガナイザー Prof. Hidesaburo Hanafusa  
(The Rockefeller University)
8. 講師および演題
  - (1) Dr. Mariano Barbacid  
(Bristol-Myers Squibb Pharmaceutical Research Institute)  
“Oncogenes of Human Tumors.”
  - (3) Prof. Hidesaburo Hanafusa  
(The Rockefeller University)  
“Protein Phosphorylation and Cell Transformation.”
  - (2) Dr. Thomas Graf  
(European Molecular Biology Laboratory)  
“Viral Oncogenes Causing Leukemia.”
  - (4) Dr. Tom Curran  
(Roche Institute of Molecular Biology)  
“Fos and Jun : Oncogenic Transcription Factors”
  - (5) Prof. Arnold Levine  
(Princeton University)  
“Mutant p53 DNA Clones From Human Colon Carcinomas Cooperate With The Ras Oncogene In Transforming Primary Rat Cells : A Comparison of The Hot Spot Mutant Phenotypes.”

○千里ライフサイエンスセミナー

ブレインサイエンスシリーズ 第1回「神経伝達機構」

日 時 平成3年3月15日(金)午前10時～午後4時

場 所 信用保証ビル3F (地下鉄御堂筋線千里中央駅すぐ)

(大阪府豊中市新千里東町1-2-4 TEL06(835)2715)

主 催 財団法人千里ライフサイエンス振興財団

協 賛 株式会社千里ライフサイエンスセンター

プログラム

1. 21世紀を迎えての神経科学の展望

(理化学研究所国際フロンティア研究システムチームリーダー) 伊藤 正男

2. 神経伝達物質の受容体と受容機構

(京都大学医学部附属免疫研究施設長・教授) 中西 重忠

3. 神経細胞の情報伝達と細胞骨格

(東京大学医学部教授) 廣川 信隆

4. 受容体の薬理学

(京都府立医科大学教授) 栗山 欣彌

5. 受容体の遺伝子発現と多様性

(大阪大学医学部教授) 遠山 正彌

参加費 主催・協賛団体会員：5,000円

一般(非会員)：7,000円

大学関係：3,000円(講演要旨集合む)

参加申込締切 定員(100名)になり次第

参加申込方法 ①会社団体名②所在地(〒、TELも)③参加者氏名、年齢、所属名・  
役職名⑤振込月日を明記の上、葉書(又はFAX)で下記宛お申し込み下さ  
い。参加費は三和銀行千里中央支店・普通預金No.3656634・財団法人千里ラ  
イフサイエンス振興財団口座宛お振込下さい。なお振込の際振込者名の前  
にB1とご記入下さい。

申込先 〒565 豊中市新千里東町1-4-1 阪急千里中央ビル9階

(財)千里ライフサイエンス振興財団ブレインサイエンスシリーズ係

TEL06(871)5535 FAX06(871)5530

○国際シンポジウム「化学療法における DNA トポイソメラーゼ」

期日：1991年11月18日(月)～20日(水)

場所：愛知県産業貿易館（名古屋市）

主催：日本癌学会

プログラム概要

- 1 Genetics and Biology of DNA Topoisomerases
- 2 Inhibitors of DNA Topoisomerase I
- 3 Inhibitors of DNA Topoisomerase II
  - i) Inhibitors of Bacterial DNA Topoisomerases
  - ii) Inhibitors of Mammalian DNA Topoisomerases
- 4 Drug Resistance and DNA Topoisomerases
- 5 Preclinical and Clinical Studies of Topoisomerase Inhibitors

外国招待講演者（予定）

James C. Wang Warren E. Ross William T. Beck Harold C. Neu  
Leroy F. Liu Kenneth N. Kreuzer L. Mark Fisher  
Milan Potmesil Ole Westergaard Kurt. W. Kohn 外

準備委員会

委員長 安藤 俊夫  
委員 池田日出男 桑野 信彦  
大野 竜三 佐藤 謙一  
岡田 浩佑 寺田 清  
小黒 昌夫 中野 洋文  
菊池 韶彦

International Adviser

太田 和雄 Leroy F. Liu  
田口 鐵男 Milan Potmesil  
塚越 茂 James C. Wang  
西野 武志 Ole Westergaard

興味のある方は第1サーキュラーをご請求下さい。

請求先：〒464 愛知県名古屋市千種区鹿子殿1-1

愛知県がんセンター研究所

生化学部内 ISTOP 係 安藤俊夫

## 「創薬基礎科学研究の推進について(勧告)」を採択

平成2年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る10月17日から19日まで、第110回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その総会に採択された勧告等を中心に、同総会の議事内容等についてお知らせします。

### 日本学術会議第110回総会報告

日本学術会議第110回総会(第14期・第6回)は、平成2年10月17～19日の3日間開催された。

1 総会第1日目の冒頭に、先に逝去された、時永淑会員(第3部)及び大谷茂盛会員(第5部)を悼んで黙禱を捧げた。続いて、会長からの経過報告、各部・委員会報告の後、内規改正、勧告、対外報告の3案件の提案説明が行われた。これらの案件については、同日の午後の各部会での審議を経た上で、第2日目の午前中に審議・採択された。

2 今回総会で採択された事項は次のとおりである。

(1)日本学術会議の運営の細則に関する内規の一部改正  
本件は、①来年春の第14期最後の総会が5月(通常は4月)開催になったことに伴い、「副会長世話担当研究連絡委員会の運営に関する総会決定」の適用期間を、1か月間延長するとともに、②第14期限りの措置として、地球圏-生物圏国際協同研究計画(IGBP)のフォローアップ組織として、地理学研究連絡委員会に「IGBP専門委員会」を設置するために、関係各部等の研究連絡委員会委員定数について必要な処理を行ったものである。

(2)創薬基礎科学研究の推進について(勧告)

本件は、薬科学系の3研究連絡委員会と薬理学研究連絡委員会が従来からの検討結果を勧告案として取りまとめ、第7部提案として、今回総会に付議したものである(この勧告の詳細は、別掲参照)。この勧告は、同日午後直ちに内閣総理大臣に提出され、関係省庁に送付された。

(3)第6常置委員会報告-外国人研究者・大学院留学生受入れに関する問題点と改善の方策について-

本件は、第6常置委員会が、今期の重要課題の一つとして審議を重ねてきた結果を「対外報告」として取りまとめたものを、外部に発表することについて承認したものである(この報告の詳細は、別掲参照)。

3 以上の諸報告及び提案審議のほか、特に、近藤会長から、前回総会で討議された南アフリカ共和国科学者の我が国入国をめぐる諸問題については、その後、外務省と折衝した結果、ビザ発給手続きの合理化措置が講じられ、国際学術連合会議(ICSU)の理解が得られたとの報告があった。また、提案事項採決後行われた自由討議では、大学等高等教育関係予算拡充問題、遺伝子操作に関する法規制問題等について意見交換が行われた。

4 第2日目午後には、「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」が開催された(この意見交換の詳細は、別掲参照)。また、第3日目の午前中には各特別委員会が、午後には各常置委員会がそれぞれ開催された。

### 創薬基礎科学研究の推進について(勧告)

#### (勧告本文)

優れた医薬の創製すなわち創薬の研究は、空前の高齢化社会を目前にして、健やかな長寿を目指す健康社会実現のため、さらには国際的立場から地球上の全人類の福祉に貢献するため、我が国にとって大きな意味を持つものである。特に、多くの成人病、老年病、またエイズやいわゆる難病等についての的確な予防薬・治療薬の創製が待望されている。しかしながら、これらの疾患に対する優れた医薬の創製は世界的にみて、医薬創製のよりどころとなるべき基礎理論、研究技術の発展が十分でないため遅々として進んでいない。とりわけ我が国は先進国の一角を占めているとはいえ、大学、企業、公的研究機関共に、ひとつの疾患の予防・治療に変革をもたらし得るほどの画期的医薬創製の実績に乏しく、国の内外から研究態勢の遅れが指摘されている。とはいえ、最近のバイオサイエンス分野の急速な展開と、我が国科学者のこの方面での活躍の実績をみるならば、学際的な創薬基礎科学研究の推進を図り、これによって人類の福祉向上に貢献することは、現下の我が国にとって緊要の課題である。

このため、早急に創薬基礎科学研究の推進組織を設け、これを核とした強力かつ広範な研究態勢の確立を図るべきである。これに当たっては、医薬の創製における倫理の尊重を基本理念とし、生体機構及び病態の解析研究とそれに基づいた独創的・画期的医薬の創製を指向する分子設計並びに薬効・安全性評価の基礎理論の樹立、さらに薬効・安全性の測定技術・ヒトの病態のシミュレーション技術等、各種の新技術の開発研究を特に重視すべきである。

この研究推進組織の設置には、関係省庁が関与すると共に、地方自治体、大学及び民間の参画を可能とし、また、関連科学各分野の学際的なネットワークを構築するなど多层次的な協力と交流による研究の推進を図るため、格段の效果的措置を講じ得る形態とすべきである。

日本学術会議は、創薬基礎科学研究の推進を図るため、上記の趣旨に基づいて必要な施策を速やかに講ずるよう勧告する。

## 第6常置委員会報告—外国人研究者・大学院留学生受入れに関する問題点と改善の方策について—(要旨)

(平成2年10月18日 第110回総会承認)

外国人研究者・大学院留学生の受入れを促進するうえで、言語、研究環境、外国人研究者の任用、大学院留学生の学位、外国人研究者・大学院留学生の選考が問題になる。

日本語能力は研究の対象とする学問分野や研究課題との関係が留意されねばならない。分野によっては、日本語能力は日常生活に必要なもので足り、研究のためには英語の能力が必須である。研究者の受入れに当たり、その研究に耐え得る日本語又は英語の能力を備えているかを十分に審査しておくことが、研究を実りあるものとするために必要である。

貧弱な研究設備のまま、また十分な研究費を持たないまままで外国人研究者を受け入れる事は受け入れた外国人研究者を失望させるだけでなく、日本人研究者の研究を阻害する。また劣悪な居住環境や、事務局等の対応組織の不備も、外国人研究者の研究活動を妨げる。国は、研究環境を整備することに対して十分な予算措置を講ずべきである。

我が国の大学における外国人研究者の任用は、その道が開かれているとはいえ、まだ十分でない。外国人研究者の任用に関して広く情報を提供する機関の設置、あるいは大学等において外国人研究者を一定数受け入れる体制の確立が望まれる。

大学院留学生の博士学位の取得は、帰国後の処遇と関係して問題となっている。受入れ大学院において、博士学位の取得促進につき一層の改善努力が払われることが期待される。

外国人研究者の選考については、受入れ側が研究者の素質をよく理解し、公正な基準によって行うことが大切である。大学院留学生については、素質の多様化と学生数の急増に伴い多くの問題が生じており、その選考方法に対し根本的改善が要望される。

## 解剖学研究連絡委員会報告—日本における解剖学の教育と研究(現状の考察と将来への展望)—(要旨)

(平成2年9月21日 第758回運営審議会承認)

自然科学の急速な発展に伴い、医学部・医科大学における教育・研究・診療のすべての分野に、大きな変化が生じた。すなわち研究手法の開発、研究機器の発達により、既存の学問領域の進歩に加えて、新たな学問分野が分化し、教育内容は多様化すると共に著しく増大した。さらに人口の増加と高齢化、経済の成長など種々の社会的要因の変化も複合されて、医学における教育と研究の重点と目標にも変化が生じた。それらは、これまで医学の基礎を形成して来た伝統的な講座に、とりわけ強い影響を与え、その在り方について検討し、改善をはかる必要性を生じさせた。

本報告は、このような状況を踏まえ、我が国における解剖学の教育と研究について、現状を考察し、今後の在り方に関する指針をまとめたものである。報告では、解剖学の定義と使命、医学教育と研究における解剖学、解剖学教室の構成、解剖学者の養成、医学部他教室及び社会との関係などの、現状と問題点について検討し、医学の変貌に対処すべき改善の方途を明らかにすると共に、将来に向けての展望が示唆された。

## 総会中の「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」

今回総会の第2日目の午後には、1時から4時間にわたって「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」が行われた。従来この時間帯には、その時々々の学術上の重要課題を取り上げて、会員による「自由討議」が行われてきた。今回は、これに代わり、第14期も2年余を経過し、余すところ9か月足らずとなったこの機会に、今期の当初に決定された第14期活動計画において、「緊急に調査審議を行って第14期中に適切な形で報告・提言を取りまとめるべき課題」ごとに設置された各特別委員会から、今までの審議状況を報告してもらい、それに基づいて会員間の意見交換を行って、各特別委員会の今後の審議の参考に供することにしたものである。

1 まず最初に、医療技術と社会に関する特別委員会の水越治委員長(第7部)から、同委員会における「脳死をめぐる問題」に関する審議の経過を取りまとめた「中間まとめ」について報告がなされた後、「日本人の国民性に根ざした死の概念との関わり」、「臓器移植を必要とする患者と臓器提供者の需給関係の問題」、「死の認定基準のあり方」、「前期の学術会議における脳死問題に関する審議状況との関係」等について意見交換が行われた。

2 次に、農業・農村問題特別委員会の水間豊委員長(第6部)から、同委員会が今後取りまとめることを予定している「農業・農村のもつ今日的意義と課題(仮題)」の概要について報告がなされた後、「他の先進諸国の農業との比較の必要性」、「国内外の政治との関わり」、「世界の食糧問題に対する日本農業の果たすべき役割」、「他産業を絡めた農業・農村の振興策」等について意見交換が行われた。

3 最後に、人間活動と地球環境に関する特別委員会の吉野正敏委員長(第4部)から、同委員会が現在取りまとめを行っている「人間活動と地球環境に関する日本学術会議の見解(案)」について報告がなされた後、「地球環境教育の重要性」、「国際学術協力事業等国際的対応のあり方」、「医学・保健問題との関わり」、「地球環境保全と経済成長との関係」、「南北問題との関わり」等について意見交換が行われた。

## 第15期日本学術会議会員選出のための登録学術団体の概況

本会議では、現在第15期(平成3年7月22日～平成6年7月21日)会員(定員210人)選出のための手続きが進められているが、先般6月末日を締切期限として、学術研究団体からの登録申請が受け付けられた。その後日本学術会議会員推薦管理会で審査が行われ、結果は次のとおりであった。

学術研究団体の登録申請の審査結果  
申請団体数……………952団体  
登録団体数……………915団体

※日本学術会議会員推薦管理会が登録した915団体名は、日本学術会議月報平成2年12月号に掲載されるので、御参照願いたい。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34  
日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291